

川島忠之助について（そのⅡ）

富田 仁

1

川島忠之助がフランス語を最初に修めたのは横須賀製鐵所でのことであつたが、この製鐵所の首長として活躍したレオンス・ヴェルニーについて、しばらくみておきたい。



川島忠之助
(明治十年、ミラノにて)

ヴェルニーのことに關しては、従来これと云つてまとまつた伝記もなく、その人物像をあきらかにするような著作もない。

だが、日本とフランスとの交渉史上、横須賀製鐵所の建設は、きわめて重要な意義をもつものとして史家たちのさまざまな考察を受けているが、不思議なことに、首長のヴェルニーの伝記的研究は乏しいのである。

フランソア・レオンス・ヴェルニー François Léonce Verry はフラン

スのチベットとも呼ばれる中央山塊ジュラ・ピレネーズの中のアルデシュ峡谷に沿った標高三百メートル、人口一万余の小さな町・オーブナ Aubenas で、一八三七年十二月二日午前四時にマチュウ・アメデ・ヴェルニー Mathieu Amédée Verry を父とし、マリ・テレーズ・ブラシエ Marie Thérèse Blachier を母として生まれた。アルデシュ Ardèche 県オーブナは、ヴァランスからバスでおよそ二時間の距離、西方七十キロ離れたところにある町で、製粉と絹の染物と合成繊維の取引きの中心地であり、マロン・グラッセとジャムの名産地としても知られている。

昭和四十三年、NHK特別取材班は『ドキュメンタリ 明治百年』の企画の一環としてヴェルニーの生家を訪ねたが、のちにこれを記録としてまとめ、刊行している。

山国なので自然貧しく、出稼ぎが多い。パリの喫茶店で働くギャルソンは、この地方の出身者でほとんど占めているといつてもよい。

横須賀造船所を建設するため、幕末に來日したフランス人技師のフランソワ・ベルニーは、調べてゆくうちにオーブナの出身であることがわかった。彼に率いられた船大工や鍛冶たち九十八人のお雇い外人の団は、この周辺の出身が多かつたらしい。百年前はるる極東まで、不自由をしのんでやって來たのも、手つとり早く金になる仕事の魅力と、出稼ぎに馴れた地方の出身者であるという条件がそうさせたのではないか。

山の頂きにあるホテルから中腹に向かって降りてゆくと、田舎町には珍しく、高い塀をめぐるした一郭に出る。山の傾斜を利用して入口は一階、裏庭は二階になった城館風の邸宅が、ヴェルニー家であつた。



ヴェルニーの肖像画

『ドキュメンタリ 明治百年』

オーブナの素封家に生まれたことで、ヴェルニーそのひとは出稼ぎに赴くようなことはなく、長じるに及んでバリの工科大学に進学し、一八三七年これを卒業し、技術者としてフランス海軍に入った。ヴェルニーはやがて上海で砲艦建造に従事したが、その任務を終えて帰国しようとしていたとき、たまたま駐日フランス公使レオン・ロッシン^{エゴン・ロッシン}と Léon Roches の招きを受けて来日することになったのである。ヴェルニーは元治二年正月、上海から江戸に到着した。

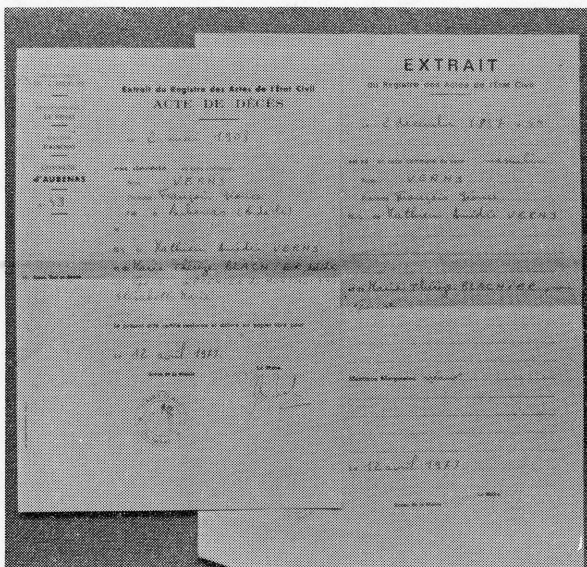
来日後のヴェルニーの活動は『横須賀海軍船廠史』その他に記録をとどめているのでおおよそのことはわかるが、来日以前と帰国後の足どりについては必ずしもはっきりしているわけではない。その点、NHK特別取材班のオーブナ探訪は貴重な試みであった。ヴェルニーの生家についての詳細な報道を含めて、それはまことに興味深いものがあるが、その記録の一端をつぎに引用しよう。

日本から持ち帰った鎧びつや、弓矢、陶器の花瓶、茶器、勲二等の旭日章、和との浮世草紙や漢書、版画の類が所狭しと飾られて、オリエンタルムード

を盛りあげていた。日本と違って湿度の低い土地柄のせいであろうか、保存も上々で、埃にまみれているでなく、虫に喰われているでなく、さして色もあせずに所を得て置かれているのを見ると、百年の時間が一気に縮まる思いがする。横須賀造船所の建物や、富岡製糸工場、さらには長崎の三菱造船と思われる写真もあった。写された幕末はこうして日本人の目の届かぬ南仏の片田舎に、百年の夢をむさぼり続けていた。

『ドキュメンタリ 明治百年』

ヴェルニーの来日以前の正確な足どりがよくわからないのは、いまでもわがらない。また、その帰国後の消息にしても同様である。ヴェルニーの子孫は百五十名も現存しているというが、ヴェルニーの結婚の記録はオーブナの役場にはみられない。ヴェルニーの妻エリザベト・マリ（一八三九年八月一日〜一九二四年三月二日）が旧姓ブルニエ・ド・モンモランと称したことはヴェルニーの戸籍からはっきり



ヴェルニーの生誕記録(右)と死亡記録(左)

(オーブナ市役所発行)

している。これはヴェルニーの生家裏にある墓地の夫妻の墓に刻まれた碑銘からあきらかである。

フランソア・ヴェルニー

造船技師 一八三七年二月二日生

一九〇八年五月二日没

妻 エリザベート・マリ

旧姓 ブルニエ・ド・モンモラン

一八三九年八月一日生

一九二四年三月二日没

ヴェルニーが日本に妻を伴っていたことは帰国の折の送別の宴の席上において、後述のように琥珀織二巻を夫人のために贈られたことからほぼはっきりしているが、来日当時二十七才の青年ヴェルニーは、まだ多分独身だったのではないだろうか。このような疑問を抱くのは、ヴェルニーには滞日中に日本婦人とのラヴ・ロマンスが伝えられているからである。

幕末に来日したフランス人たちの中には日本女性を愛人とした者が少なくなかった。メルメ・ド・カシオンには通称メリンス・お梶がいたように、ヴェルニーにもお浅という女性がいたようである。横須賀の船頭で久平という者の娘・お浅はヴェルニーを愛し、ヴェルニーもお浅に深く愛を抱いたのだった。

お浅は、ウエルニーの正妻たるべき約束であったが、幕府瓦解の爲め横須賀製鐵所創設も中止となり、ウエルニーが、佛國に歸へることとなつたので、結婚に至らなかつたが、しかし横須賀は明治の聖運に會し、海軍大鎮守府兼造船所となつたから、お浅ウエルニーの戀愛も、意義があつた譯けである。

(中里棧庵『綿羊娘情史』)

ヴェルニーが柴田日向守製鐵所奉行と海上から横須賀を視察したとき、船頭久平の家で休息する機会が重なり、久平の娘のお浅と恋に陥

ったというのであるが、それは横須賀製鐵所の草創期の頃のこととみられる。船頭久平については、残念ながら、なにもわからない。これは余談だが、メルメ・ド・カシオンの愛人であつたお梶の場合も、その父親は江戸駒込の光源寺の大観音堂の堂守であつたと伝えられるが、現在、東京都文京区向上二丁目三十八番地にある同寺には、第二次大戦中戦災で焼失したこともあつてか、まったく記録はない。同寺では、お梶の話も初耳であるというふうに、カシオンとのロマンスもすでに歴史の流れに埋没しまつてゐる。庶民の記録が残されることの少ない時代にあつては、それも仕方のないことなのであろうか。

ヴェルニーとお浅の関係にしても、これを傍証する資料はほかに見当たらないようである。おそらくヴェルニーは、独身時代の自由な生活をお浅との戀愛で楽しんだものと思われるが、明治二年に再び帰国した時点で結婚したものと考えらる。新政府に移管されて軌道にのり始めた製鐵所の首長として、ヴェルニーは年齢的にも正式な結婚が必要であつたのであろう。お浅との仲も幕府の崩壊ですでに終つていたようである。

ヴェルニーは、日本での顕著な活動のあと、明治九年三月十三日、横浜出航のフランス郵船タイナス号で帰国の途についたが、ヴェルニー帰国は新政府が高給を払わなくてはならぬお雇い外国人を解雇する方針によるものであつた。ジャン・ラウルはその間の事情をつぎのように叙述している。

日本当局は工廠の事業を外国人技師に委託しないことを確実にし、経済的工場管理を實行する為に経営上の権利を取返す意志を表明した。

新しい海軍の編制が發布されてその内規の草案に依れば欧羅巴人は最早や顧問の資格でしか容れないことになつて居たが、此の方法は時期尚早であつた。日本技術者の養成は彼等自身の責任を以て船舶を建造し工廠の機能を適当に發揮するには充分でなさうである。それは兎も角もヴェルニー、サヴァチエニ氏は明治九年三月限り職を止められチボーデ、デュボン二氏のみ顧問の資格で横須賀に止まる様通達された。

ヴェルニー氏は異例手続の対象であつて日本政府は彼自身及彼を通して仏國海軍大臣に書を寄せ仏國海軍が日本の新興海軍を援助する為技術を提供して日本に与えた奉仕的作業に対して感謝の意を表した、そしてヴェルニー、サヴァチュ、両氏の為特別の拝謁が許され拝謁中「みかど」は彼等が各其の領域に於て尽した功勞を感謝する意味の優渥なる御言葉を賜つた。

〔横須賀海軍工廠の創設と佛蘭西人の見たる黎明期の日本〕

明治新政府は慶応四年閏四月一日に製鐵所を幕府から接收して以来その経費の節減を計ろうとし、従来ヴェルニーに一任していた經濟的独斷事項を協議事項にし、お雇いフランス人の數も漸次減少し、日本人をこれに代える方針を定めて実行していったのである。

ヴェルニー解雇はその線に沿つてなされたことであつた。

『横須賀海軍船廠史』の明治八年の頃にも、つぎのような記載がある。

十一月十五日日本所創業以來既二十餘ノ星霜ヲ經テ百事殆ト整頓シタルヲ以テ海軍省ハ向後外國人ヲ本所首長ノ重任ニ置クヲ不必要ト認メ外務卿寺島宗則ヲ介シ佛國公使サンカンタンニ本所雇佛人ウエルニー等ノ解雇ヲ承諾センコトヲ要求セリ其要領左ノ如シ

一、ウエルニー氏ハ本年中心横須賀造船所首長ノ任ヲ解キ其事務ヲ我邦官ニ繼續セシムヘシ然レトモ同氏ノ解期ハ無期限ナルヲ以テ我政府ハ解雇ノ際同氏ニ三ヶ月分ノ俸給ヲ贈與スヘキコト

一、チボヂー氏ハ來年三月頃我國ニ歸著スヘキヲ以テ同月以後ハ造船所顧問トシテ更ニ二十ヶ月乃至一年間繼續スヘシ同氏歸著迄ウエルニー氏代リテ顧問ノ任ニ當ラハ一層我政府ノ好都合ナレトモ其諾否ハウエルニー氏隨意タルヘキ事

一、サバチエー氏及モリスウエルニー氏モ亦ウエルニー氏同様ノ條件ヲ付シテ本年中心解雇スヘキコト

ヴェルニーは年間一万ドルという高給取りであつたので、新政府としては經濟的にきわめて負担であり、早急に解雇したかつたにちがいない。

ない。解雇にあつて二十年余の功績に対して、ヴェルニーと医師サバチエーは宮内省に招かれて、明治天皇から親しく勅語と勲章を授けられた。明治八年十二月三十日午前九時のことであつた。

海軍少輔伊集院兼寛、主船少匠司清水誠之に伴なわれてヴェルニーとサバチエーは宮内省に赴き、坊城式部頭の誘導で明治天皇と謁見したのであつた。まず天皇からそれぞれに勅語があたえられ、それに奉答文を奏上した。

ヴェルニーには「我邦造船所ヲ創設セシ以來十一ヶ年ノ久シキ汝首トシテ其職ヲ奉シ能ク其力ヲ効シ諸場ノ建築及我新造艦船ヨリ内外修理ノ艦船其他ノ製造事業ニ至ル迄一々之ヲ擔當シ遂ニ今日ノ成績ヲ見ル是レ實ニ汝ノ功勞朕深ク之ヲ嘉賞ス且汝カ歸路恙ナキト將來ノ幸福トヲ望ム」という勅語があたえられた。ヴェルニーは奉答の辭を奏上したが、これは清水誠之が邦訳した。

天皇陛下ニ奉答ス

天皇陛下ニ奉職中數多恩恵ノ勅語ヲ拜受シ奉リ今般我政府ニ歸任セントスル期會ニ望ミテ御満足被爲在候段被 仰出難有

天皇陛下ニ奉謝候惶恐謹言

翌三十一日、ヴェルニーはフランス公使サンカタンノ論告に依じて横須賀造船所首長の解任を承諾し、顧問の職に就くことになつた。

明治九年一月十二日、ヴェルニーは赤松則良海軍少將兼大丞と事務引継ぎをすませた。同月十六日、延邊館で送別の宴が開かれたが、席上、ヴェルニーとサバチエーは太政官の命として勲章贈与の旨が伝えられた。また、ヴェルニーは書棚一個、花瓶一對、ヴェルニー夫人もまた琥珀織二巻が贈られた。この宴席には主催者の川村海軍大輔のほか三條太政大臣、伊集院海軍少輔、遠武主船助、造船所雇フランス人のデュボン、フランソア、ジュウエット、サルダーが顔をみせ、清水誠之少匠司が通訳をつとめた。

二月二十六日、顧問ヴェルニーは、製鐵所創設以來の経過報告書を

六つの項目にわたって叙述し、日本政府に提出している。「第一款 建築」「第二款 機械及器具」「第三款 人員」「第四款 學校」「第五款 製造及修理」「第六 經費」「結論」が、その内容である。ヴェルニーは「余ハ日本政府ノ命ヲ領シ半途ニシテ横須賀ヲ去ラントス今ヨリ以降政府ハ適宜ノ方針ヲ以テ造船所ノ工業及學事ヲ共進シ數年ヲ出テスシテ日本創立ノ造船所ニ完全ナル好結果ヲ收獲シ之ヲシテ其名聲ヲ宇内萬國ニ彰揚セシムルヲ得ハ余ノ素望乃チレリ」とその報告書を結んでいるが、ここにはヴェルニーの胸中察するにあまりある想いが看取される。ヴェルニーとしては、まだ業半ばで帰国しなくてはならぬ無念さを否めなかったのだろう。造船所の将来への期待を万感こめて述べているところは注目される。

ヴェルニーは齡四十近くして故郷に錦を飾ることになったのであるが、滞日十一年間には二度フランスに帰っている。慶応元年二月三日、ロッシュ公使の提出したヴェルニーの服務規定書に「今回一時佛國ニ歸リ」とあるように、来日直後から慶応二年四月二十五日までと、明治二年三月十八日から翌三年二月十二日までと二度帰国しているのである。

ヴェルニーの横浜出航の日は前述のように明治九年三月十三日であったが、いつ故郷オーブナに戻ったのか、詳かではない。おそらく同年五月か六月のことであつただろう。

帰国後の消息はよくわからない。

ヴェルニーは、帰国後フランス海軍を辞め、故郷オーブナの北方二百二十キロの地にある工業都市サン・テチエヌで鉱山の経営に当たったが、死亡証明書によれば、一九〇八年五月二日にオーブナで死去した。

なお、ヴェルニーの日本での功績は、横須賀製鐵所（のち造船所）首長としての活動だけにあつたわけではない。洋式灯台の設計者としてのそれも十分に高く評価されている。

一八六六年の六月、幕府と英仏米蘭の四カ国との間に協議が行われた際、イ

ギリス公使 *Palmerston* から、開港場付近の沿海樞要地に、至急灯台を設けてほしいという提案があり、このことは幕府の代表と四カ国公使との間で調印された。その結果、一八六九年二月以来、観音崎、野島崎、城が島、品川の四カ所に、わが国ではじめての洋式灯台の点火をみるに至ったが、いずれも *Verny* の設計によるもので、観音崎、品川、城が島は首席建造者の *Louis Florent* が、野島崎は副首席の *Jules Thibaudier* がそれぞれ監督に當つた。

（手塚竜磨『日本近代化の先駆者たち』）

横須賀製鐵所（造船所）の技術指導者としてのヴェルニーの功績は、幕末維新の日仏関係の歴史の上でもきわめて大きいものであり、現在ヴェルニーの功績をたたえて、横須賀臨海公園にはヴェルニーと小栗上野介の胸像が建っている。これは大正三年（一九一二年）の横須賀開港記念日に諏訪公園の丘の上につくられたものだが、のちにセメント像に改作されて現在地に移されたのである。

2

川島忠之助はやがて横須賀製鐵所の製図見習工を辞めてしまった。

慶応四年閏四月一日付で製鐵所が新政府に接収され、神奈川府裁判所に主管を移されたが、必らずしも政府の方針が定まらず、伝習が怠りがちであつたことにその退職の原因があつたようである。

明治二（一八六九）年、新政の方針決せず、製鐵所の教師達に俸給を与えなかつたので、自然教授が中止になった。それで川島氏は、見習工をやめて横須賀から横浜に出て、語学練習のため、フランス人の齒科医アレクサンドルのもとに使丁として住み込んで苦学した。

（柳田泉「川島忠之助伝」）

柳田泉は忠之助退職の時期を明治二年としているが、月日については触れていない。

だが、ここで注意しなくてはならぬのは、『横須賀海軍船廠史』の明治二年三月の項の記述である。

三月製鐵所譯官中嶋才吉ハ技術傳習生ノ再置ヲ管轄廳ニ請求シテ曰ハク舊幕府ノ製鐵所ヲ創設セシヨリ以來既ニ五六ノ星霜ヲ閱シテ工業ノ進歩頗ル見ルニ足ルモノアリ今日ノ狀況ニ據リテ推測セバ一二年ヲ出デズシテ完全無缺ノ域ニ達スベキヲ信ズ然レドモ製鐵所ノ工業ハ佛人ヲ待チテ始メテ活動スルモノニシテ一朝其全員ヲ解雇スルニ至ラバ前途大ニ憂フベキ事項ナシトセズ是レ技術傳習生ヲ再置スルノ必要アル所以ニシテ他年內國人ニ製鐵所百般ノ事業ヲ委ネント欲セバ此方案ノ外他ニ良策アルヲ見ザルナリ舊幕府ハ夙ニ此點ニ着眼シテ造船、機械及建築等ノ學術ヲ少年有爲ノ生徒ニ傳習セシムルノ端緒ヲ開ケリ然ルニ新政府ハ昨年五月之ヲ廢シテ爾來未ダ其再置ノ計畫アルヲ聞カズ伏シテ望ムラクハ自今更ニ生徒ヲ募リ雇佛人中ノ學識アルモノヲ選ビテ本務ノ餘暇ニ教授ノ任ヲ兼ネシメンコトヲト云々

中嶋才吉は横濱語學所出身で、旧姓大坪と称したが、忠之助の従兄であり、製鐵所入所の機縁をつくってくれた人物である。この中嶋才吉が明治二年三月の時点で技術伝習生再置の願いをし、しかも前年五月に伝習生の制度が廃止されたことに触れているところに、以上の記述はすこぶる重要な意味をもっている。忠之助が柳田の文章のように明治二年に退職しているとしたら、忠之助は伝習生制度の再開が要請されるようになった時期に退職したことになるのである、いささか奇妙である。中嶋才吉はあきらかに明治元年五月に伝習生の制度を止めたと云っているのであるが、柳田の文章中の「製鐵所の教師達に俸給を与えなかつたので、自然教授が中止になった」（傍線筆者）という記述が伝習生制度の廃止を指しているものならば、忠之助の製鐵所辭職は明治元年五月以降、おそらくは明治二年二月までのことと考えられる。だが、柳田は「明治元（一八六八）年の末に川島氏は、製圖工見習という名目で、横須賀製鐵所（造船所の前身）に入った。これは氏の今一人の従兄弟中嶋才吉氏の懇意による」（「川島忠之助伝」）と記していることを考慮するとき、それはきわめて不都合な推定となる。明治元年の末に入所し、翌年二月には退職したということになるからである。

の日付は不明である。中嶋才吉が忠之助を製鐵所に入れたのが彼自身の入所以後のこととすれば、忠之助の製鐵所入りを明治元年末とすることはかなり信憑性をもつものと考えられる。だが、中嶋才吉が製鐵所に入所する以前にすでに関係をもち、忠之助を世話したかもしれないというふうな推測も可能である。横須賀製鐵所の公的記録の性格をもつ『横須賀海軍船廠史』の前掲の記述にしたがえば、伝習生制度は明治元年五月の時点で廃止されたのであり、忠之助が製圖工見習として入所した時期も、当然伝習生制度の廃止以前のことであつてはならないのである。つまり、柳田泉の文章は十分に検討されなくてはならないことになるのである。「明治元年の末」は「慶応三年の末」の誤りではなかつたのではないだろうか、という疑いが出てくるのである。そうすれば、明治二年三月以前の時点で製鐵所を辭めたことも、かなり妥当なこととして考えられるのである。伝習生の制度が廃止されたあと、然るべき授業も行なわれないので、厭気がさして横須賀を去ろうと決意したのではないだろうか。

明治二年正月、ヴェルニーは製鐵所に雇われているフランス人技師たちの契約満期に関して、その解雇と継続との理由を主管の神奈川府裁判所の寺島宗則判事に具申ししているが、このように製鐵所のフランス人技師たちの間に少なからぬ異動をみたのである。同年三月十八日には、ヴェルニーの一時帰国が許され、この月に前述のように中嶋才吉による伝習生の再置の請求がなされている。忠之助にしてみれば、フランス人技師の異動までみられる混乱期にあつて、授業もなくなくなつた製鐵所に居残っている必然性を見出せずに退職を決意したのであらう。中嶋才吉が伝習生の再置を申請する以前に、忠之助は製鐵所を去つたものと考えるべきであらう。というのは、中嶋才吉がそのような申請を行なつてから製鐵所を辭めるといふことは、忠之助の立場ではとうてい許されない行動であるからである。

忠之助は明治二年三月以前に製鐵所を退職したことが確かであるならば、その入所の時期は明治元年五月の伝習生制度の廃止以前のことであつてはならない。そこで「明治元年の末」という記述が一年前の

中島才吉が伝習生の制度を復活させるべく進言したことはただちに管轄官庁に認められ、翌四月十日には伝習生の学則の編成が製鐵所に命ぜられた。中島才吉が伝習生再設置について具体案を示していたことがあきらかになるのだが、これは、それほど実現性の高い伝習生制度の復活が意図されていた時期に忠之助が製鐵所を去る決意をしたことを考えさせない大きな材料として注目されるのである。

明治二年十月二十七日、横須賀と横浜の二製鐵所は大藏省の管轄に移され、十一月十八日には山尾庸三がその事務を総括することになった。このようにして新政府の製鐵所に対する方針も次第に整えられて、同年十二月現在では製鐵所の官吏はつぎの二十一名を擁していた。

同	同	同	土木大令史	土木權少佑	出納權少佑	同	土木少佑	出納兼土木樞大佑	監督大佑
同	同	同	正五位等	從四位等	從四位等	同	正三位等	判正二位等	判正一位等
久木田	糸山	渡邊	吉田	稻垣	大島	中島	山口	志村	兵動
喜平次	左平次	清次郎	來輔	喜多造	八十太郎	才吉	成一郎	左一郎	忠平

[illegible]

計二十一名

明治三年一月五日、製鐵所は所内に各工場を竣工させ、学校を建設して技術伝習生を募集する必要を大蔵省に建言している。帰国中のヴェルニーも二月十二日にフランスより戻り、製鐵所はその活動を強化する姿勢を打ち出している。

三月二十九日、製鐵所は伝習生のための仮寄宿所に民家をあててゐることの許可を大蔵省に求めたり、技術学校を疊舎と称し校則の原案を民部省に提出したりして、伝習生の制度の復活と強化の準備を大きく進めた。

製鐵所における伝習生徒への授業は、この年四月七日から始められたもののようである。中島才吉と稻垣喜多造の二人が学務を専ら統轄し、フランス教師を補助にして生徒にフランス語を教えたのである。

疊舎規則の大意が伝えられているが、それによると、入学志望者は、原則としては十三才から二十才までであり、書籍、文具、食事は、官給であり、主要教科は造船学と機械学であるが、それを修めるにはまず仏語学を学習することが必要であり、数学も必修であることなどがわかる。参考までに疊舎規則大意をつぎに引用しておく。

研究紀要 第21集

雇入年月	満期年月	雇繼年月	満期年月	月俸	職名	姓氏	及年齢
千八百六十五年九月一日	千八百六十九年二月一日	佛人職工雇繼中滯留		八百三十三 弗三三	首 長	ウエルニ	三十二年十一月
千八百六十九年五月十日	不詳	同		六百三	副首長	チボヂ	三十一年
千八百六十五年十二月十六日	千八百六十九年十二月八日	同		四百十六 弗	醫 師	サバチエ	四十年
千八百六十五年九月一日	千八百六十九年九月二日	同		四百弗	建築課長	フロラン	四十年五月
千八百六十五年八月十六日	千八百六十九年八月十八日	同		三百弗	會計課長	メルシエ	三十九年
千八百六十六年一月十八日	千八百七十年一月十三日	同		百七十弗	建築頭目	ヂュモン	四十七年十一月
千八百六十六年四月一日	千八百七十年四月二日	同		百六十五 弗	船工頭目	トロステッ	三十六年十一月
同 三月十五日	同 三月十五日	同		同 百五十 弗	鑛鑿頭目	ウエツト	二十九年九月
同 二月二十五日	千八百七十年二月十六日	同		同	同	マンジュ	三十七年
同 二月十五日	同 二月十五日	同		同	船具頭目	リツシヨニ	三十年
同 一月十九日	同 一月十九日	同		同	製工頭目	ビラール	三十七年九月
同 四月十五日	同 四月十五日	同		百二十弗	石工頭目	ジョラール	四十七年八月
同 四月十五日	同 四月十五日	同		百二十五 弗	製圖職	ジョラール	三十四年六月
同 四月十五日	同 四月十五日	同		百弗	鑛鑿職	シヤツペ	三十四年五月
同 三月二十日	同 三月二十日	同		九十五弗	製鐵職	スィデー	四十二年七月
同 三月二十日	同 三月二十日	同		八十弗	鑛鑿職	バスチア	二十六年六月
同 四月一日	同 四月一日	同		九十弗	船工職	ミッシア	三十一年三月
同 四月一日	同 四月一日	同		百弗	鑛鑿職	デニエール	二十七年七月
同 三月二十五日	同 三月二十五日	同		百二十弗	同	ポルドネ	二十六年三月
同 三月二十五日	同 三月二十五日	同		七十五弗	同	コルドネ	三十六年五月
同 四月一日	同 四月一日	同		九十五弗	同	ベリコ	四十四年三月
同 四月十六日	同 四月十六日	同		六十五弗	同	リュシヤニ	四十二年六月
同 三月十五日	同 三月十五日	同		九十五弗	同	マルタン	三十二年六月
同 二月十五日	同 二月十五日	同		四十弗	同	バ サ ン	十九年
同 二月十三日	同 二月十三日	同		八十弗	同	サバチエ	二十八年
同 二月十日	同 二月十日	同		百五十弗	同	ジュボア	四十一年三月
同 十一月十日	同 十一月十日	同		百二十弗	同	プロボ	二十九年六月
同 十一月十日	同 十一月十日	同		百五十弗	同	ケルマレック	三十一年六月
同 十一月十日	同 十一月十日	同		同 百五十 弗	同	エビエール	三十三年十一月
同 十一月十日	同 十一月十日	同		百五十弗	同	ジラール	四十一年
同 十一月十日	同 十一月十日	同		八十五弗	同	レガール	四十一年
同 十一月十日	同 十一月十日	同		百五十弗	同	フランソワ	三十年
同 五月十一日	同 五月十一日	同		百五十弗	同	フホール	三十八年
同 四月十日	同 四月十日	同		百弗	同	ラペール	三十四年

賃金規則大要

- 第一條 入學志願者ハ總テ父兄若クハ親族ノ保證ヲ要ス若シ在曩中篤疾ニ罹リ或ハ非法不品行等ノ舉動アルトキハ保證人ニ通知シテ退曩セシム
但在曩中ノ輕疾者ハ醫藥ヲ官給ス
- 第二條 入學志願者ノ年齡ハ十三、四歳以上二十歳迄ヲ限リトスレドモ資性英敏若クハ修學ノ經歷アル輩ハ特ニ制限ニ據ラザルコトアルベシ
- 第三條 在曩中ハ修學用器具、書籍、筆墨及食料ヲ官給トシ衣服其他生徒自身ニ屬スル費用ヲ保證人ノ支辨トス
- 第四條 主眼ノ學科ハ造船學及機械學ナレドモ先ツ佛語學ヲ修メシメ漸ク其意義ヲ解スルニ至リテ數學ヲ授ケ逐次歩ヲ進メテ竟ニ本科ニ達セシムベシ
- 第五條 教則及學科ノ選定ハ總テ教師ノ主宰スル所タルヲ以テ生徒ハ一意之ヲ遵奉セザルベカラズ
- 第六條 在曩期限ハ生徒ノ勤怠能否ニ應ジテ遲速アルベシト雖モ一二ノ實用學科ヲ講究シタル後ニ非レバ退曩ヲ許サズ
- 第七條 一科若クハ數科ヲ卒業シテ退曩ヲ請願スル者ハ其學科ノ應用試驗期ヲ經過シタル後ニ至リテ其請ヲ許スベシ
但シ應用試驗ノ期限ハ在曩期限ノ半トス
- 第八條 應用試驗期滿チテ退曩スルトキハ某學科卒業證書ヲ授與シ且其族籍姓名ヲ新聞紙ニ掲ゲテ世上ニ廣告スベシ
- 第九條 官衙ニ於テ前條ノ卒業者ヲ採用スルトキハ其技能ニ応ジテ相當ノ俸給ヲ與フベシ

（『横須賀海軍船廠史』）

横須賀製鉄所の曩舎の主要学科が造船學にあつたことは、のち（明治四年四月七日）に横須賀造船所と改称したのを考えるとき、きわめて当然のことであつた。

ヴェルニーは中島才吉、稻垣多喜造に伝習生の教育に専念させるとともに、倉庫主事モンゴルフィエー、會計課長メルシェー、鑪鑿頭目ウエット、船工職デニエールに伝習生の教授をも兼務させ、前記三名には一回一ドル、デニエールには七十五セントの教授料を支払うことを管轄庁に具申している。もっともモンゴルフィエーはフランス本国

で官途に就くためにすぐにこの任務から離れている。明治三年五月現在の製鉄所のフランス人技術者は首長ヴェルニーを含めて三十七名で、その姓名、年齢、契約期限のリストを三十四ページに掲げ、横須賀製鉄所のフランス側スタッフの顔をみておこう。

3

忠之助は明治政府の方針が定まらず動揺している製鐵所に忠之助なりに愛想をつかしたのか、これを辞め、そのあと、横浜のフランス人歯科医アレクサンドルの家に使丁として住み込んだことは柳田泉の文章にあきらかにされている。柳田はアレクサンドルについてはとくに説明していないが、このフランス人歯科医は日本近代歯科医学史上に名を残す人物B・アレクサンドルのようである。
アレクサンドルについて、『資料 御雇外国人』（小学館）では、誤って二人の人物に分記されている。

アレキサンドル【原綴】[Alexandre]【年齢】三年三月当時四〇歳【国籍】仏【雇入場所】横浜【雇主雇期間】松江藩（一八七〇年四月一五日—七一年一〇月一五日）【職種】語学、医学、化学、鉱物学教師【給料】月給最初六ヶ月



アレクサンドル

は三五〇元、其後は四〇〇元【出典】外六

アレキサンドル【原綴】②Alexandre[sic]【没年】①一〇年【国籍】仏【雇主雇期間】東京府平民・辻徳兵衛（①九年八月二〇日より一二ヶ月、病死に付一〇年四月九日免状返納）【職種】歯病治療教師【給料】①月給六〇円【住所】①三十間堀一丁目一番地雇主方 ②第一大区八小区三十間堀一丁目一番地【出典】①外三②外九

右の記載ではアレキサンドルというフランス人が二人いたことになる。だが、今田見信『開国歯科医人伝』所収「アレキサンドル」によると、この二人のフランス人は同一人物でなくてはならない。

アレキサンドル R. Alexandre が来朝した年月はつまびらかでない。明治三年頃初め松江藩の医学教師として来たというのが記録のはじまりである。（中略）アレキサンドルは初め横浜で開業した後東京に来て、八年には築地入舟町一丁目一番地に住し、銀座に開業したのは後のことであろう。アレキサンドルは医師の資格をも持っていたものようであるが、わが国では歯科の業を専ら営んだようである。

アレクサンドルは松江藩のお雇い医学教師であるが、歯科医として東京に開業したことも今田見信の文章はあきらかにしている。アレクサンドルの生いたちも来日事情も詳かではない。一八三一年頃の生まれであり、当初は石田研堂によれば、「公使館醫」（『明治事物起源』）として日本に滞在したが、やがて静岡藩を経て松江藩に雇われたようである。アレクサンドルは、明治三年四月十四日、松江に到着しているが、松江藩が雇入れたのは横浜のことであった。アレクサンドルはすくなくとも三月には横浜にいたことが考えられる。横浜にはフランス公使館もあり、アレクサンドルは松江に赴くまでそこに滞在していたものようである。

川島忠之助が横須賀から横浜に出て来てフランス人歯科医 B・アレクサンドルの家に住み込んでいた時期を明治三年三月以前とみる一つの大きな根拠がアレクサンドルの松江赴任に見出せるように考えられ

るのである。アレクサンドルが横浜を離れるまで、忠之助が使丁として住みこんでいたかどうかははっきりしないが、それに近い時点までいたかもしれないのである。

忠之助がこのフランス人歯科医の家にいかなる経緯で使丁として住み込むようになったものかは不明であるが、柳田泉が忠之助そのひとから聞いた話では「語学練習のため」で、その間の事情をつぎのように述べている。

いづれ誰かに伝手を得たのであろう。この間の勉強は、ほとんど文字通りの苦学であった。教えをうけるにも言葉は思うように通ぜぬ、本で勉強したいにも本はない、村上英俊の『仏語明要』が唯一の参考書という有様である。だからたまたまうわからぬなりに、フランス人のいうことを聞くより仕方がない。このアレクサンドルのもとで千六百何年かに出版された日本ポルトガル辞書のフランス訳を始めてみたときには、天地間にこれ程重宝な書物もあるのかというので、欣躍したほどであった。（川島忠之助伝）

忠之助が製鐵所のフランス人を仲介にしてアレクサンドルの家の使丁となったことも考えられるが、詳細はまったくわからない。とにかく、まだフランス語もよくわからない状態でアレクサンドルの家に住み込んだため、忠之助はすこぶる苦勞したものとみえる。

当時フランス学の大家として名声を博した村上英俊の本邦最初のヨーロッパ風の仏和辞書『佛語明要』（一八六四年）を唯一の手がかりに、忠之助はフランス語の勉強に励んだ。アレクサンドルは、前述したように静岡藩に雇われたのち、フランス公使館付の医師として横浜に住んでいたものと推察される。アレクサンドルが静岡藩に雇われていたこととフランス公使館付の医師であったことのいずれが時期的に早かったのかという問題があるが、忠之助がアレクサンドルの家の使丁となったのはアレクサンドルの横浜在住時代であり、明治二年三月に近い時期以前であったという点から、多分アレクサンドルは静岡藩に雇われたのちに横浜に居住して公使館付の医師になったものと推定

されるのである。

語學修業とは、明治三年藩が静岡藩より招聘した二佛人に就いて、佛語を修めた者を云ふ。二佛人とはワレット（三十六歳）アレキサンドル（四十歳）で前者は語學、後者は語學醫學化學礦物學を講ずる外に、ワレットは軍隊の訓練を行ひ、従來の英式を佛式に改めた。（三年四月十四日著松四年七月三日離松）

（桃裕行「松江藩の洋學と洋醫學」）

アレクサンドルは、松江藩が同じく横浜で雇入れたワレットに半月遅れて松江に着任した。ワレットの場合、その雇用期間は明治三年四月一日から四年九月三十日までで、最初六カ月は月給二五〇元、それ以後は月三〇〇元の契約であった。アレクサンドルの方が百元高給である。

松江藩では、まず江戸藩邸において洋学研究が盛んになり、そのあと、松江に學問所、國學所、洋學所などを合体した修道館が開かれた。慶応元年六月二十七日のことである。だが、新學館の竣工をまちきれず、松江では洋學教育が始められ、慶応二年には従來の蘭學、英學に仏學を加え、布野雲平、間宮篤郎が修道館洋學所を主管した。維新後、明治二年五月八日には、修道館は皇學と漢學を合体したが、洋學の方は庄司郡平一等助教以下が担当した。明治二年と三年の交には、庄野の代わりに間宮渾之助と片寄海藏の二名が一等助教試験として洋學所を主管している。明治三年のスタッフはつぎの通りである。

洋學一等助教並議員	間宮渾之介
洋學一等助教醫學助教兼勤	片寄海藏
洋學校書記並掌籍試補兼勤	根岸廉助
洋學查書記	中村準助
同	渡部尚一郎
礦物學修行	田川俊藏
舍密學修行	小林祖一郎
語學修行	鹽野門之助

同	小川雪影
航海術修行	岸野眞次郎
佛學修行寮長	内田珍之助
語學修行寮長	竹内平六
語學修行	玉木十之助
同	戸田孫市
同	平野鐮次郎
同幼小	高尾鐵之丞
書生寮長試補英學引受並	廣瀬恭介
洋學三等助教助勤兼勤	飯塚育造
書生寮長試補蘭學引受並	井上善右衛門
洋學三等助教助勤兼勤	飯塚克己

（「松江藩の洋學と洋醫學」より）

アレクサンドルが松江藩に招かれたのはこの時期のことで、彼の教え子にはのちの住友鑛山部長・鹽野門之助、陸軍中將・落合豐三郎、海軍少將・竹内平太郎、法学博士・梅謙次郎、工学博士・山口半六、關西大学総長・澁川忠二郎などがいた。

アレクサンドルが明治三年四月十四日、松江に到着するやすぐに医学伝習が行なわれたことは、修道館が梅謙次郎にあたえたつぎの書類からも確認される。

薰二男 梅 謙次郎
 右此度御雇ニ相成候佛人アレキサントル江便リ醫學修行被仰付旨ニ候事
 四月廿八日 修道館
 梅謙次郎殿

梅は医学を嫌ってこれを辞退しようであるが、いまではアレクサンドルに師事して誰が医学を修めたか不明である。桃裕行は鉱物学、舍密学を修めた人たちがアレクサンドルについて修行したのではない

かと「松江藩の洋學と洋醫學」で推定されているが、じつところ、アレクサンドルの松江での活動はよくわからないのである。松江藩との契約は明治三年四月十五日から翌四年十月十五日までであったが、アレクサンドルは四年七月三日には松江を離れている。アレクサンドルが松江の地でフランス医学を伝えようとしたことはその契約期限切れのために実際には中途半端なものに終わってしまったといえ、日本医学史上容易に看過しがたい出来事として記録されてよいことだろう。

アレクサンドルが松江を去ったのちの消息は、「明治五年東京銀座歯科診療所を開く」(石井研堂『明治事物起源』)という記述がみられるまで不明である。もともこの記述に対して、今田見信は「アレクサンドルは初め横浜で開業し後に東京に来て、八年には築地入舟町一丁目一番地に住し、銀座に開業したのは後のことであろう」と、異説を述べている。今田説は竹澤國三郎がアレクサンドルを雇入れたときに東京府宛に提出した願書と契約書を根拠にしているのである。

外国人雇入之願

- 一 西洋口中歯病療醫師 佛國人アレキサンドル 四四年
給料一カ月 金六拾圓
 - 一 雇期限 明治八年七月一日ヨリ明治九年六月三十日迄向十二ヶ月
 - 一 結約所 築地入舟町一丁目一番地
 - 一 住所 第一大區九小區竹川町十八番地 竹澤國三郎方
- 右者今般西洋口中歯病療施行仕度候ニ付西洋醫術教師トシテ相雇申度奉存候御差支モ無御座候ハバ御検査ノ上御許容被仰付被下度別紙條約横文竝譯書相添此段奉願候也

第一大區九小區竹川町十八番地

竹澤國三郎 ㊦

明治八年七月

東京府知事 大久保一翁殿

アレクサンドル雇入れに際して竹澤國三郎はかなり面倒な手続きを

踏んだようである。

今田見信はその経緯をつぎのように書いている。

明治八年一月芝罘田川町の竹沢國三郎は、フランス語に長じている駅通局官員大川某の紹介によつて京橋のアレキサンドルの許に通学したが何しろ業余の修学では思うに任せないところがあるので、のち意を決し当局の許可を得、初め明治八年七月一日より九年六月末日まで一年間の契約でアレキサンドルを自己独自の教師として招聘した。当時外国人を雇い入れるには府知事の許可を必要としたので出願後三度も府庁に呼び出され辛じて府知事の許可を得た。すなわち竹沢が同区竹川町十八番地に借家して、そこにアレキサンドルを寄留させたのである。築地入船町一丁目から竹川町に転居させたわけである。この家屋は石造家屋で、明治八年七月三日から翌九年六月迄の一年間の約束で、芝罘一丁目十五番地の古川与四郎から借りたもので、一カ月三十三圓の家賃を竹沢國三郎がアレキサンドルとの契約に基いて負担して支払い住居せしめたのである。雇入れたのちは毎日四時間宛の授業をうけた。

契約期間がすみ竹沢の学業おおいに進みたるをもつてアレキサンドルはフランス語の歯科修業証書を明治九年六月二十九日付で授けた。

(『開国歯科医人伝』)

アレクサンドルが竹澤國三郎を弟子とした明治八年一月以前にすでに何人かの門人が彼の門に入っていたようである。明治六年には浅草栄久町の池野谷貞司、七年一月には下関の免養九一、また八年には神翁金松が門人となったのである。ただ、神翁はアレクサンドルの内妻ハナと問題を起して辞めたということである。

なお、アレクサンドルが竹澤國三郎に授けた歯科修業証書は今田見信「アレクサンドル」によると、つぎのようなフランス文であった。

Le Soussigné certifie que Mr. Takezawa Kunisaburo a été mon élève pendant dix huit mois, pendant lesquels il s'est conduit en homme d'honneur, en consequence je l'autorise a se servir de mon nom au mieux de ses intérêt en priant les autorités, de lui accorder le permission dont il jugerait convenable de demander.

Tokio le 24 juin 1876.

Docteur Alexandre M. D.
Professeur de Grottesse Dentaire.

竹澤家にはこれの邦訳文が伝えられている。

竹澤國三郎余ニ從ヒ齒科ヲ修ムルコト十八ヶ月拮据勉勵セシヲ以テ學術並ニ進ム能ク齒科ノ醫タルニ堪ヘタルニ依リ確證スルコト如何

西曆一八七六年六月二四日

ドクトル アレクサンドル

川島忠之助について（そのⅡ）

竹澤國三郎との契約が切れたあとのアレクサンドルの消息については、今田見信は「某地に行つてフランス語の教師となつたといひ、あるいは桜井一斎氏は招聘せられたというもつまびらかでない」と記しているが、『資料 御雇外国人』では、東京府平民の辻徳兵衛に明治九年八月二十日から一年契約で齒病治療教師として月給六十円で雇われている。そのときの住所は「三十間堀一丁目十一番地辻徳兵衛家」である。アレクサンドルは竹澤家の過去帳によると、明治十年三月二日に病死しているという。法海直入信士の法名がつけられているアレクサンドルの死亡地は日本のどこか詳かにされていないが、病死により、その医師の免状は明治十年四月九日付で返納されている。

アレクサンドルは、治療所に「自働式の上下顎の開閉する人形に義齒の見本をならべた看板」を出して衆人の注目を浴びたが、当時としては齒科の技術にかなり長じた人物であつたようである。エピソードの一つを伝えておこう。

明治九年築地に於てアレクサンドルが中村中蔵という俳優に上顎を四十五円で調製したことがあつたが、世間ではその高価に驚愕して一時都下の各新聞に掲載せられた位です。

（『デンタルビー』第二号）

川島忠之助が使丁として住み込んだフランス人齒科医とは、このような人物であつたのである。

アレクサンドルのもとにあること五ヵ月、同三（一八七〇）年の春になって明治政府の方針が決定して、第一回の伝習生を募集したので、氏は早速それに応募し、首尾好く選に當つて造船機械科に入った。

（川島忠之助伝）

ここに川島忠之助の再度の横須賀製鐵所入所となつたのであり、フランス語のみならず技師として必要な造船学と機械学に磨きをかけることとなつたのであつた。

《主要参考文献》

- NHK特別取材班『ドキュメンタリ 明治百年』（日本放送出版協会 昭和四十三年）
- 横須賀市役所『横須賀海軍船廠史』（横須賀海軍工廠、大正四年）
- ジャン・ラウル、倉永小三訳「横須賀海軍工廠の創設と佛蘭西人の見たる黎明期の日本」（横須賀市教育研究所、昭和二十七年）
- 手塚龍磨『日本近代化の先駆者たち』（吾妻書房、昭和五十年）
- ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料 御雇外国人』（小学館 昭和十年）
- 柳田泉「川島忠之助伝」（春秋社『明治初期翻譯文学の研究』昭和三十六年）
- 桃裕行「松江藩の洋學と洋醫學」（『日本醫史學誌』一三〇三、一三〇五号 昭和十七年）
- 川島順平「父・川島忠之助について」（早稲田大学比較文学研究室『比較文学年誌』第十号、昭和四十九年）